

結・たより, Vol.9

発行:神戸 : ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1997.11.25. - 8p

請求記号:震災-6-z26

これからの住まいについて考える ～デンマークの高齢者住宅を訪ねて～

弘本由香里

阪神・淡路大震災は、とりわけ高齢社会における住まいの問題の深刻さを露呈している。その根本に、日本における住宅あるいは住環境の質そのものの問題、安定した居住を保障する住宅供給システムのあり方の問題、あるいは住宅を基盤にした生活支援サービスの質と量の問題が浮かび上がってくる。かつて高度経済成長の過程で、十分な議論のないままに先送りにしてきた問題のつけといってもいいかもしれない。

こうした思いを抱きながら、この夏北欧の高齢者住宅を訪ねる機会を得ることができた。デンマーク・ノルウェー・スウェーデンの三カ国を駆け足で回ったのだが、ここではデンマークの事例を少しばかり紹介しながら、これからの住まいについて考える手がかりとしてみたい。

デンマークは日本と異なり、高度経済成長期に高福祉の基盤を築き上げ、高齢化が進み、低成長経済期に入ると同時に、厳しい財政状況の中でいかに高福祉の原則を全うしていくかという、文字どおり血のにじむような議論と工夫、ドラスティックな改革を伴うチャレンジを続けている現状がある。石油危機後の1979年に、世界に知られるデンマークの高齢者福祉の三原則「生活の継続性」「自己決定権」

「自己資源（残存能力）の活用」を打ち出し、1987年には「高齢者および障害者住宅法」を施行。施設ケアから在宅ケアへの大転換を図ると同時に、住まい・住環境から高齢者の自立を支えるという、社会保障の理念と政策の枠組みを明確にしている。また、地方分権が徹底されており、行政の中味はそれぞれの地域特性に応じるように、県と市の裁量に任されている。もちろん、こうした福祉の理念と政策を支えているのは、国民の政治参加度の高さであるし、積み上げられてきたコンセンサス形成の努力デモクラシーを尊ぶ意識レベルの高さである。

商店街の屋根の上に増築された高齢者住宅 デンマーク・ベアリューセ市Tofebo2



デンマークの住宅の20%は、パブリックハウスと呼ばれる、低所得者向けの賃貸住宅である。こうした住宅を手がける非営利の住宅組合がデンマークには多数あり、高齢者住宅の建設・運営も、市もしくは市の委託を受けた非営利の住宅組合や住宅管理会社等が行っている。身体機能の衰え等によってもなつて、それまで住んできた住宅に住み続けることが負担になった場合に、高齢者住宅への入居を希望すると、市が状況を判断して入居を決定する。入居者は、まず建築費用の2%にあたる保障金を支払い、月々の家賃を支払っていくが、家賃は収入（年金等）の15%以内と決められており、収入に応じて市から家賃補助が出る。

1987年の「高齢者および障害者住宅法」以降、各市は高齢者住宅の建設に力を注いでおり、新たに計画・建設されるものから、古い住宅を改造するものまで様々なパターンがあるが、なるべく生活利便性が高くまた効率的にケアサービスを提供できる立地を選び、様々な世代の住宅に解け合うように配慮されている。計画住戸はリビングと寝室にキッチン・ダイニング、シャワー・トイレ、バルコニーが付いて65平方メートル程度のものが一般的であるが、80平米を越える3室タイプのものもある。そして、必ず社会参加の機会を得ることができるよう、共有の空間が設けられ、居住者の住宅運営への参加はもちろん、主体的に様々なアクティビティや地域活動に参加できるようにバックアップするソフトなシステムが組み込まれている。こうした機会を得ることによって、高齢者の自立度や生活の満足度が大いに高まるからである。高度な介護を必要とする人を対象とする高齢者住宅の場合には、共有空間に市のケア担当者が待機する部屋が設けられ、アラームシステムも設置される。軽度の障害に対応する高齢者住宅の場合は、一般の住宅に近いもので、個別の障害への対応が図られている。





オレコレ（シニア・コ・ハウジング）外観・テラス・室内 デンマーク・オーテンセ市 Det Krealeve Seniorbo



こうした、在宅ケアへの転換、高齢者住宅の建設とともに、数は少ないものの新たに登場してきたのが、高齢者自らが集まって主体的に計画し、市や住宅組合等がバックアップして建設を行う、通称「オレコレ（オールド・ピープル・コレクティブ・ハウス）」と呼ばれる高齢者の共同居住型住宅（シニア・コハウジング）である。10～20程度の独立した住戸が繋がり、中心に木工や織物やパーティなどが楽しめる充実した共有スペースが設けられている。オレコレの共同居住のルールは非常に緩やかで、食事もそれぞれで自由にとっており、維持管理も大方は管理会社に委託している。つまり比較的元気な高齢者が、自ら積極約に自分の人生を豊かなものにしていくために、選択する住まいの形であり、高齢者が少しでも長く生き生きと充実した人生を、ケアサービスを必要とせず暮らしていけるとすれば、市にとっても大きなメリットであると考えられているのである。

オレコレ（シニア・コ・ハウジング）共用ルーム
デンマーク・オーテセン市 Det Krealeve Seniorbo



高齢者住宅であれ、オレコレであれ、いずれにも高齢者福祉の三原則とデモクラシーを貫こうという理念がある。また、訪問した住まいの住空間は、それぞれの住まい手の個性で見事にコーディネートされ、借り物ではない、その人ならではの人生の表現空間となっていた。その豊かさは忘れられない。

さて、日本を振り返れば、震災によって凶らずも露呈した、危機をいかに乗り越えていくのか。そこで最も重要なのは、人生の基盤となる住まいや住環境、そしてそれを支える社会システムのあり方であろう。社会条件が異なるとはいえ、デンマークの試みは、より厳しい条件のもとで私たちが向き合っていかなければならない問題に多くの根本的な示唆を与えてくれる。

ピンチがチャンス、私の出発――

渡辺 和美

1月17日、あの日からひたすら走り続けて来たような気がします。私にとって、あの日には人生を変える日になったのです。

私の仕事はカウンセラーです。と言ってもカウンセリングの収入だけでは成り立たず、ある小さな会社で事務をしながら、カウンセラーとして仕事をしていました。ところが地震で会社の仕事はストップ状態。先のめどがたたないのに、給料が払えないと言われてしまったのです。交通のまだ不自由な中、乗り継ぎ、焼け跡を歩いて元町の事務所まで通っていた私は、行っても仕事のない状態で、仕方がないかと辞めるしかありませんでした。

さて辞めると収入がなくなります。地震以後の“心のケア”の必要性が言われ始めました。しかし自分から相談にくる人はわずかです。避難所などにはボランティアのカウンセラー、大学の先生、セラピストが随分入っていたようですが、実際にはどの程度ケアができたのか、……。私もボランティアで行きましたが、手応えはもう一つ、何もできませんでした。かえってカウンセリングはボランティアで無料相談になってしまい、有料のカウンセリングがやりにくくなってしまったのです。震災前から来られていたクライアント（相談者）は震災後3週間ほどしてから、また相談を再開しましたが、新しく相談にこられたのは数件でした。

定収入のなくなった私は、仕事を探さなければなりません。震災から1カ月ほど過ぎた頃、初めて新聞に、ある工場の従業員募集のチラシが入りました。私は飛びつくようにその会社に電話をし、面接を受け、仕事にありついたのでした。不安な日々の後毎日決まった仕事があるのはありがたいとつくづく思い

ました。明日のことを考えなくてすむのですから。しかしその安定した日々も半年で崩れることになります。やり慣れない仕事で、毎日手を使い過ぎて、指が曲がらなくなり、腕が腱鞘炎になってしまい、日常生活も不自由なほどになってしまったのです。“いざとなれば何でもできるわよ！！”といつも啖呵を切っていたのに何と情けないことでしょう。結局、その仕事は辞めざるを得なくなってしまいました。

でも落ち込んではいられません。次は新聞広告で結婚相談所のカウンセラーというのが目に入ったのです。これは何とピッタリと、うまくその仕事についたのですが、．．．実態は、結婚できない人をいかに妥協させて、結婚させるかという仲人屋さん。当然といえばそうですが、高望みの人達ばかり組み合わせるのですから、そう簡単にはいきません。

多額の入会金を払って会員になっているのですから、男女とも注文の多いこと。収入、学歴、容姿 etc. 若い女性は医者、実業家を希望し、男性は自分の年齢が40歳以上でも相手は若い女性をと。何ともやりきれなさを感じて、働いている人を見回すと私よりずっと年上の方ばかり、60歳以上の人はザラ。会社のやり方に疑問や文句があっても、辞めると他に仕事がないからみんな我慢をしています。結局、金もうけ第一主義に嫌気がさして、1カ月で退職、11月になってしまいました。

お歳暮のシーズンになり、お歳暮のアルバイトで年末をしのぎ、年が明けました。世間がある程度、日常を取り戻してきたのかカウンセリングの相談も少しずつ増え、震災でストップされていた講座やグループ相談等が再開され、アルバイトをしながら時間のやりくりをするのが無理になってきました。収入のことを考えると不安でしたが、他の仕事をいろいろやっているうちにカウンセラーの仕事が自分の一番やりたい仕事なのだと思うようになっていました。

形あるものは残らない、他人から称賛されることもないけれど、人との出会いの中で、その人の人生の転機に、又問題の解決に、手伝わせてもらえる。そして乗り越えた喜びを共に味わうことができる。こんな思いは他の仕事では得られませんでした。 これまでは臨床心理士資格などの問題で、この仕事を続けていけるのだろうかと迷ったり、いつかできなくなるのではと不安があったのですが、震災後、少しずつ増えていく仕事をやりくりしながら続けている間に、私には私なりの役割があるのだと思うようになったのです。

カウンセラーの仕事だけに絞っていこうと決めた時、もう一つ私には夢がありました。震災で見られたコミュニティでの心のサポートです。昔はカウンセラーがいなくても、近所のおばさんや物知りのおじさんが子育てや家族の問題のよろず相談をしてくれていました。個人を尊重する現代社会ではなく、その力が震災の町で復活していたのです。他所からきたカウンセラーに相談はしにくいけれど、いつも顔を合わせている近所の人とおしゃべり、アドバイスで元気が出たという話はよく聞きました。

日常生活で、聞き上手で心の整理を手伝える、そんな心のサポートをできる人が増えるともっと暮らしやすくなるのではないかと！そんな人が一人でも増えるように、人間を理解するための心理学、カウンセリングの講座を開こう、今がそのチャンス！と思いました。

3ヶ月かかって準備し、4月から「メンタルサポート講座」を始めたのでした。そこに集まってくれた人達と引き続き活動をしていきたいと「メンタルサポート研究会」も発足させました。改めてこの3年足らずの日々を振り返ってみると、1月17日、あの日が私の新しい出発の日だったのだと思います。ピンチがチャンスくれたのだと....。

ユイのひとびと

☆藤本久美子さん

「コープリビング甲南」の福祉介護センターは～とらんどがオープンして1年が経ちました。様々な介護者のお話を聞き、現状の厳しさや、介護をされている方のたくましさに改めて気づくことが多いです。

寮を出て、一人暮らしを始めたこともあり30歳を目前に、今が頑張り時かなと思っています。また皆さんにお目にかかれるのを楽しみにしています。

* 藤本さんは「は～とらんど」主任で福祉用具選定相談者もされています

☆石東直子さん

神戸へ引っ越しました（帰って来ました）結婚後、初めての移り住みです。今までのライフスタイルになかった何かも始めたいなと思っています。お近くにお越しの節はぜひお立ち寄りください。JR住吉駅の山側、東へゆっくり歩いて10分です。

☆安達和美さん

神戸看護短大を辞職して、11月11日に再び、“死の社会文化”の研究を深めるために渡米されました。おちついたら、「結・たより」に報告を送りますとのこと。滞在先はミネソタ大学です。

☆中川俱子さんがNHKドラマの主人公に！？

[新聞記事あり 神戸'99. 11. 16 省略]

ということで、11月12日に1日ばかりで撮影があり、「ユイ」のミーティング風景ということで、中川・長谷川・尼川の二人も1時間ほど、とても有意義で楽しい話し合いをテレビカメラを意識せず、インタビュー役の三田篤子さん（主演女優）がほとんど口を挟む余地がないくらいにパワフルにやったのですが...

15分の番組でそのシーンはたったの1分たらず。あんなに明晰に喋ったのに長谷川さんは笑っているところだけ、尼川はいかにもよくしゃべっている風だけど、実際に言葉になっているのは3回ぐらい、それにひきかえ、女優の三田篤子さんの登場時間の長いこと。テレビ写りも断然いい。

三田さんの案内役をつとめた中川さんも、「結局、ひきたて役だったのかもね」と。つまりこの『復興'97』はドラマ『この指とまれ2』の宣伝番組だったようです。

NHKもやってくれるじゃないの...

ドラマはどう展開しているのか知りませんが、中川さんの震災以後の“仕事”がモデルとして登場するかもしれません。

●神戸市長選挙（11月26日）、市政に市民の声を！市民グループの立ち上がり

今回は震災後の市の復興政策や財政難の中での神戸空港建設に対する批判の聲が高まり、神戸で久しくなかった無党派の市民グループ・個人と共産党、新社会党が一緒になって「たてなおそう神戸・市民の会」を作り、候補者（大西和雄氏）を擁立して闘うという選挙になりました。

前はオール与党体制で当選した（史上最低の投票率20.43%）笹山市長でしたが、今回は自民、新

進、民主、社民、民改連、公明という、どちらかと言えば保守政党の推薦と財界の応援を受けての応戦になりました。神戸市の場合、従来から“神戸市株式会社”といわれるくらい、行政が経営者的体質で、市民参加というより“市民の理解を求める”という言い方で、行政主導型の市政が続いてきました。また、市民もそれに安住してきたといえます。しかし、阪神・淡路大震災以後、生活再建の苦労を重ねてきた市民の意識は自分たちの声がもっと反映される市政を求める方向に変わってことが、今回の市長選挙で確かめられました。投票率も45.04%と前回は大きく上回りました。でも半分以上の人が選挙に行っていないと現実も一方にあります。結果は下記の通りでした。

笹山 幸俊	271,035票
大西 和雄	225,230票
村井 勉	6,458票

☆「女たちの会社ポレ・ポレ」が10月から株式会社に！

1990年、大崎洋子さんを中心に宝塚レディースアカデミー講座（公民館主催）の卒業生たちが働く女性や高齢者など地域の人々のくらしの支援を自分たちの仕事作りとしてグループを作ったのが「ポレ・ポレ」のそもそもの始まりです。

地域の中で日常生活をしっかりと見つめてきめ細かい家事・介護・育児サポートを百人の登録会員のネットワークで事業として続けてきた業績が認められ、兵庫県の新産業創造キャピタル事業に選ばれました。

大崎洋子さんは「ユイ」の会員でもあります。これからの活動を「ユイ」としても応援していきたいと思います。

(株) 女たちの会社ポレ・ポレ

宝塚市社町1-6シャルム逆瀬ビル 1F

Tel (0797) 71-0888

Fax (0797) 71-0900



「ユイ」とーくさろん

1997年も、もうすぐ終わりです。震災から3年経ちましたが、寒い季節になると地震直後の生活が思い出されます。久しぶりに集まって、それぞれの3年間と現在の活動について交流しましょう。

報告者：相川康子さん（神戸新聞情報科学研究所）

NPOって何？：コミュニティの中に新たな活動主体を創る－NPOスクールを修了して

12月20日（土）午後6時半－8時半

上御影会館 ☆中川俱子さんの設計です

神戸市東灘区御影町御影字岸本1152－12 電話（078）811－0106

[地図あり 省略]

会費： 2千円

☆軽食と飲み物付

申込みは「アルプラン」中川さんまで

FAX（078）822－4141

(c) 1997ウイメンズ・シンクタンク・ユイ (デジタル化：神戸大学附属図書館)